慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カフカと >Hyperion< 誌
Sub Title	Kafka and The Hyperion
Author	黒岩, 純一(Kuroiwa, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1977
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.274(39)- 288(25)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0288

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カフカと〉*Hyperion*〈誌

黒岩純一

最近，この雑誌に目を通す機会があったので，特にカフカとの関連を事実関係にしぼって報告してみたい。

1

〉Hyperion〈は1908年フランツ・ブライ，カール・シュテルンハイムの2人によって創刊され，1910年，僅か2年つづいただけで廃刊になった文芸雑誌である。隔月誌として出発し，1908年には順調に1号～6号までが世に出たが，1909年には7～10号，1910年には11号，12号が100頁の合併号として出ただけに終った実に短命な雑誌であった。出版していたのはミュンヘンのハンス・フオン・ヴェーバー社である。

この雑誌名からはヘルダーリンの》Hyperion《が連想されるが，〈Hyperion〈はもと〉Das goldene Vlies〈あるいは〉Horen〈と名づける筈であったと言われ，[1] 雑誌名を〉Hyperion〈と決定した積極的理由は見出しにくく，ヘルダーリンの作品との関連もまた無さそうである。〉Hyperion〈は後にカフカも書いているように，「石板のように大きな白いノートのようで，文学の薫りを漂わせた贅沢でなかなか上品な装丁の雑誌であった。フランツ・ブライには〉Pan〈や〉Insel〈と同様に文学雑誌という存在の空隙を埋め，読者に文学の楽しみを味わって貰おうとする意図があった。[2]」発行部数は僅か1050部，年間講読を受け付けるやり方で，個別に売られることはなかった。(年間48マルク，豪華装丁で100マルク)。この雑誌の一時代前に出た〉Pan〈(1895～1900)と同様に文学のあらゆる分野から原稿を載せ，文学，芸術など包括的な内容をもっている。従って決った性格のようなものはなく，無名作家の作品も載せていた。

毎号10〜10数枚のそれまで未発表のゴッホ，ゴーガン，マイヨール，ロートレック，ピサロ，ロダン，クリムト，マネー，ミレー，北斎などの絵やスケッチ，版画などを載せて意欲的な雑誌であり，これによって読者の評判を得ていた。内容もまた極めて多彩で，ホーフマンスタール，リルケ，H・マン，シュテルンハイム，ブライ，デーメル，Th・マン，マイリンク，ムシル，カロッサ，P・ヴィーグラー，カスナーの論評，その他G・メレディス，E・A・ポー，G・K・チェスタトン，P・クロデル，A・ジッドなどの作品もドイツ語に訳されて掲載された。これによって水準の高さもうかがい知ることができる。カルティベイトされた趣味によって精選された文章だけが掲載された。

フランス文学の独訳は主としてフランツ・ブライの仕事である。著述家，詩人として文名の高かったブライは大戦前のフランス精神の仲介者であり，また市民時代の末の新しいロココの代表者である。才気に富んだ，とぎすまされたエッセーや短篇によってこの時代のドイツの文学生活に大きな影響を与えていた。そのブライの個人的性格もこの雑誌に濃厚にあらわれている。1909年の7号からはシュテルンハイムが退き，ブライ一人の編集になる。雑誌にその理由は記されていないが，シュテルンハイムが多忙であったというような簡単な理由であったらしい。

2

カフカにとってこの雑誌が重要な意味をもつのは，カフカの最初の発表の場がこの〉Hyperion〈であったということで，まずこの第1号にホーフマンスタールやリルケの作品と並んで，カフカの》Betrachtung《が載ったのである。このときはタイトルもなく，ただI〜VIIIというローマ数字で番号がふられていただけであるが，後につけられたタイトルに従えば，》Der Kaufmann《，》Zerstreutes Hinausschaun《，》Nachhauseweg《，》Die Vorüberlaufenden《，》Kleider《，》Der Fahrgast《，》Die Abweisung《，》Die Baume《という8作品である。

この〉Hyperion〈の第1号が出たとき，アルフレート・ヴァルター・

ハイメルは》Betrachtung《の著者について，この名はヴァルザーの匿名ではないかと推測している。ブライは1908年夏，これにたいして「カフカはヴァルザーではなく本当にカフカと称するプラハの若い人です」[3]，と答えている。最初の作品発表ですでに注目されていたようである。

そして翌年，1909年の〉Hyperion〈第8号にも》Gespräch mit dem Beter《と》Gespräch mit dem Betrunkenen《の2篇が載る。M・ブロート，W・エムリッヒ，K・ヴァーゲンバッハ，R・ヘメルレなどは1909年の〉Hyperion〈第8号にこの2作品が載ったときをカフカの作品発表の最初であると書いているが，これは先の第1号の8篇の作品を見落していたわけで誤りである。[4] 尤もヴァーゲンバッハは後のロ・ロ・ロ・モノグラフィー叢書の中でその誤りを訂正している。[5] しかしその後も多くの研究者の間でこの誤りが引き継がれているケースが多いので注意する必要がある。カフカ研究においてはカフカの親友であったM・ブロートの存在があまりに大きいために彼の誤解がついつい看過ごされていたということであろう。

〉Hyperion〈の1号，8号に載った作品はいづれも1904年から1907年にかけての作品で，カフカが一般保険会社に入社する以前の作品である。この保険会社での生活はときに日曜出勤も余儀なくさせられるような毎日で，すでに「書くこと」なしに済まされなかったカフカには耐えがたい生活であったらしい。[6] ところが1908年には労働者災害保険局へ移り，一日6時間という短い勤務になる。かなり重要な部局であったから，実際には以前と変らぬ多忙な生活であったようであるが，精神的な解放感は大きかった。その頃，最初の作品発表がなされたわけである。

このカフカの最初の作品発表はM・ブロートの強い説得によってこぎつけたものであり，〉Hyperion〈の編集者ブライにカフカを引き合わせたのもブロートであった。ブロートは1906年12月，〉Deutsche Arbeit〈という総合雑誌（政治記事，文学，芸術関係の記事も載せるが，どちらかというと政治に力点をおいている）[7] の中でブライがブロートの最初の中編集》Tod den Toten《を論評して以来，個人的な付き合いがあり，一編に

1908年ジュル・ラフォルグを訳したりした仲であった。[8] その他にも2人で訳したオペレッタ 》Circe und die Schweine《 などがある。ブライはその頃すでに 〉Ametyst〈, 〉Opale〈 という雑誌を世に送り出し，前述したように才気溢れるエッセーや短篇などを書いて評判が高かった。カフカはブロートと共同でこれらの雑誌を予約講読していたが，それはバール，ボルヒャルト，ブロート，メル，シュレーダー，ヴァルザーなどの作品も紹介したが，主流は性文学(エロテイカ)であった。しかしカフカはブライ個人の才能を高く評価していた。そのことは 〉Hyperion〈 が廃刊になったあと，この雑誌を回想する文章をカフカが 〉Bohemia〈 紙に書いているが，その中で，「ブライ，この根つからの編集者，賛嘆に値する人間，才能の強烈さと，それ以上に才能の多様さがこの人をこの上なく濃密な文学の中へかりたてる……」と書いている。[9] 表現主義運動をあまり好まず，やや保守的とも思われた人であったが，カフカやムシルを受容したことはブライの文学的炯眼を証明している。カフカはその後，G・ヤノーホとの対話の中でもブライの人間としての魅力を語っている。「ブライはおそろしく如才のない，機智に富んだ男です。私たちは彼と一緒になるといつも愉快になります。世界文学がズボン下のままで，私たちのテーブルを分列行進するようなものです。フランツ・ブライは彼が書くものより幾まわりも大きく，はるかに分別があります」。[10]（吉田仙太郎氏訳）

また逆にブライにとってはカフカの病弱からくる控え目な人柄が印象的であったらしい。その人柄をあらわすようにカフカの散文は自分自身の内面に関心を向けている少年らしい厳格さを示しており，[11] ブライのように自分をさらけ出し，みずからを汚すタイプの作家とはまったく逆のタイプであった。彼はカフカの中にまったく別の資質をみながらもカフカの才能を正しく評価していたようである。「カフカの遺言に反して彼の作品を刊行した 》Tycho Brahe《 の詩人（M・ブロート）にドイツ文学は感謝するだろう」，と書いている。[12]

そのブライの編集する 〉Hyperion〈 の1号にカフカの作品が登場したわけで，リルケ，ホーフマンスタール，H・マン，ブライ，シュテルンハイ

ムのような作家たちと共に名前を連ねたことはカフカに大きな印象を与えたことであろう。無名の作家としてはカフカ一人がいただけであった。続いて1909年にも先に述べた2作品》Gespräch mit dem Beter《と》Gespräch mit dem Betrunkenen《とが8号に掲載された。

3

この〉Hyperion〈でカフカは作家としての歩みを始めたわけであるが，これにざっと目を通しただけでカフカの諸々の文学的関連が明らかに浮び上ってくる。次にその点について触れてみたい。

まずカフカとホーフマンスタールとの関連がある。カフカがホーフマンスタールに大きな尊敬を払っていたことはヴァーゲンバッハやブロートがかなり詳しく述べている。1902年に出た》Der Chandos-Brief《がカフカに大きな感銘を与えていたことをブロートが指摘している。[18] ヴァーゲンバッハはブロートの報告にもとづいて〉Neue Rundschau〈に載ったホーフマンスタールの》Gespräch über Gedichte《を挙げて，カフカがホーフマンスタールの中に「単純なもののもつ魔力」をみていた，と書いている。[14] ヴァーゲンバッハは更にカフカにたいする文体や言語上の影響まで指摘している。[15] カフカがブロートに最初に贈った本がホーフマンスタールの》Das kleine Welttheater《(1903) だったとも言われている。[16]

このホーフマンスタールの》Das Bergwerk zu Falun《の der letzte Akt が〉Hyperion〈第1号に，そしてまた》Cristinas Heimreise《の一景をなす》Szene aus einer Komödie in Prosa《が第6号に載っている。この雑誌に発表された段階でカフカがこれを読んでいたことは明らかである。

〉Hpperion〈とカフカの文学的関連については更にG・ヤノーホとの対話の中にもみられる。例えばヤノーホがG・K・チェスタトンの2冊の本，》Die Orthodoxie《と》Der Mann, der Donnerstag war《を入手した時にこのチェスタトンについてカフカがただちに言及した，と述べている点である。[17] これも実は10年以上もへだてて〉Hyperion〈に溯ることが

できる。即ち1909年の〉Hyperion〈第7号に》Die Orthodoxie《の最初の2章が載って，巻末にはこの本が14章から成ること，そしてこれが一冊の本となって登場するのも間もないことが広告されている。この広告は同文で8号にも出ている。チェスタトンの著作は〉Hyperion〈の発行を行っていたハンス・フォン・ヴェーバー社から次々に出版されることになるが，ドイツ語への彼の著作の最初の翻訳である。カフカはこの誌上で初めてチェスタトンに接した筈である。

その他，カフカはこの雑誌〉Hyperion〈を通じて—K・L・アマーの訳もあるが，多くはF・ブライの翻訳で—フランス文学にも接した。当時のカフカの読書は〉Hyperion〈に刺激されることが多かったようである。第4号からは巻末に編集部の推薦する新刊書が，外国の作品も含めて紹介されている。P・クロデルの》Mittagswende《やA・ジッドの》Der schlecht gefesselte Prometeus《などがブライの訳で出ることもこの欄で紹介されている。

他にはラーテナウ，シュレーダー，ストリントベルク，M・ブーバーなどの作品も挙っている。これらの作家たちとカフカとの深い結びつきはすでによく知られている。

編集部通信に載ったフランス文学で特にカフカと関係の深いのはK・L・アマーの翻訳になるH・ベートゲの》Die chinesische Flöte《やフロベールの》Erinnerungen eines Narren《であって前者はカフカの蔵書目録の中にもみられる。[18] フロベールの》Erinnerungen《についてはカフカがM・ブロートにこの紹介のあった直後に言及していて，カフカがこうした作品にすぐ目を通していたことが知られる。カフカのフロベールへの傾倒ぶりはブロートと共に》Education sentimentale《，》Tentation du Saint Antoine《などの作品を原語で読んだり，フロベールの書簡集その他を詳しく読んでいた程である。「このフロベール読書は若いカフカの世界像にぴったりあてはまる」，とヴァーゲンバッハも指摘している。[19] またフロベールについての伝記的著作や書簡集をM・ブロートへのプレゼントに利用している。[19] 旅行に彼の作品を携えて出た時期もある。カフカとフロベールと

の関連は 〉Hyperion〈 による紹介があった以前からみられるが，H・ベートゲの 》Die chinesische Flöte《 の購入はこの雑誌の新刊書紹介が動機となったのではないかと思われる。

この 〉Die Hyperion〈 の編集部通信を通じて内外の新刊書紹介をしていたのは勿論ブライである。彼はフランス現代物の精通者として知られており，A・ジッドやP・クロデルの原稿から直接翻訳していたらしい。従ってドイツ語で紹介されるのは初めてということになり，カフカもこの2人のフランス作家を 〉Hyperion〈 を通じて識ったと言えるだろう。

クロデルは 〉Hyperion〈 第1号が出た1908年にブライの翻訳で，丁度ハンス・フォン・ヴェーバー社から出た ドラマ 》Mittagswende《 によってドイツへ紹介されたと言われている。またK・L・アマーの訳になる頌歌 》Die Musen《 が 〉Hyperion〈 第2号に掲載され，更に第9号に 》Aus der Kenntnis des Ostens《，11/12 合併号にもドラマ 》Der Tausch《 が掲載されている。

〉Hyperion〈 を通してカフカは新しいフランス文学にもかなり接触したらしい。P・クロデルはフランス領事としてプラハに滞在していたことがあるが，このクロデルの出る集会にカフカも参加したことが1910年11月6日の日記に記されている。〉Hyperion〈 誌上で出会った作家にたいする文学的興味によるものであろう。その後もクロデルの戯曲 》Goldhaupt《 の朗読会にも出掛けたことがやはり日記に記されている。[20]

こうしてみると 〉Hyperion〈 はカフカの最初の発表の場であったばかりでなく，フランス文学，イギリス文学の世界へ誘ういはば世界への窓としての意味をもっていたと言える。この頃のカフカはもはや自分の作品を活字にすることに以前ほど拒否的ではなくなる。

1909年，ブロートのすすめでカフカは 〉Bohemia〈 紙に 》Die Aeroplane von Brescia《 を寄稿するが，[21] その翌年1910年には 》Betrachtungen《 のタイトルで 》Am Fenster《（後の 》Zerstreutes Hinausschaun《），》In der Nacht《（後の 》Die Vorüberlaufenden《），》Kleider《，》Der Fahrgast《，》Zum Nachdenken für Herrenreiter《 の5作品を同じ 〉Bohemia〈

紙に発表した。[22] その他にもカフカはこの 〉Bohemia〈 紙に C・シュテルンハイムと兄弟であるフェリックス・シュテルンハイムの小説 》Die Geschichte des jungen Oswald《 の論評である 》Ein Roman der Jugend《[23] や 》Eine entschlafene Zeitschrift《 と題する 〉Hyperion〈 の2年間を振り返っての論評などを書く。[24] 〉Hyperion〈 と並んでこの 〉Bohemia〈 紙の存在もカフカにとっては大きな意味をもつ。

こうして新聞や雑誌に投稿が続いたことが少しづつカフカに出版にたいする解放感を抱かせることになったようである。

カフカの作品の出版についてはM・ブロートが実に大きな役割を演じているが，1912年6月末，ブロートはライプツィッヒでカフカをエルンスト・ローボルトに引き合わせる。その時の様子をブロートが日記に記している。「みんなが非常に好奇心を抱いているカフカを連れて行く。彼らは 〉Hyperion〈 で彼のことを知っているのだ」。[25]

この時，カフカはローボルトがカフカの作品をかなり熱心にほしがっていることを知る。そしてブロートに繰返しせまられて1ヶ月半後ようやく小品を 》Betrachtung《 にまとめて渡すことになる。》Berachtung《 は18の作品を含むが，その内の半分，つまり 〉Hyperion〈 1号に含まれていた8作品と 《Zum Nachdenken für Herrenreiter《 はすでに一度印刷に付されたことがあった (〉Bohemia〈 1913, 3, 27) し，これらの内の4つの作品，》Zerstreutes Hinausschaun《, 》Die Vorüberlaufenden《, 》Kleider《, 》Der Fahrgast《 は 〉Bohemia〈 紙 (1910. 3. 27) と 〉Hyperion〈 第1号とに2度まで印刷されたことがあったのである。カフカはブロートになかなか原稿を渡さず，出版を無しに済ませたいと日記に書いたが，「発表を予定して旧作を読むと有害で，馬鹿げた自意識が生ずるのだ」，とも言っている。[26]

しかし1912年8月13日，カフカから 》Betrachtung《 の原稿を受け取ったブロートは翌日それをローボルト宛に送った。この年の12月中旬，》Betrachtung》 が出版されてみると，ブロート (〉März 〉1913), オットー・ピック (〉Aktion〈 1913), アルバート・エーレンシュタイン (〉Berliner

Tageblatt〈 1913) が次々に論評してなかなか好評であった。なかでもブロートとエーレンシュタインの批評はカフカをよろこばせた。[27] しかし印刷された僅か800部という肝心な本の売れ行きは思わしくなかったようで，その頃カフカがルードルフ・フクスに語った面白い話がある。「》Betrachtung《 はプラハで11冊売れました。10冊は私自身が買いました。残りの1冊を誰が買ったのか知りたいと思います[28]」。

このカフカにとって処女出版となった 》Betrachtung《 に続いて M・ブロートの編集する 〉Arkadia〈 の中でカフカは 》Das Urteil《 を発表する。[29] これは一夜のうちに8時間で一気に書かれた作品であり，カフカの作品発表にたいする態度はこれにより大きく変化する。〉Hyperion〈 やそれに続く 〉Bohemia〈 紙に作品や論評を発表したことがいわばスプリング・ボードの役割を果したわけで，いまやすっかり積極的になる。》Betrachtung《 の出た1912年という年はカフカが珍らしく好調に，また意欲的に執筆した年である。この年の秋，ローボルトがクルト・ヴォルフとの共同経営から抜けて，S・フィッシャー社へ移ったので，ヴォルフは1913年2月，ローボルト社をクルト・ヴォルフ社と改名する。

1913年4月，カフカはこのヴォルフの求めに応じて作品を送った。これは 》Der Heizer《 というタイトルで創刊したばかりの《Der jüngste Tag《 叢書の3番目の本として4月中に印刷に付された。この時カフカはヴォルフに宛てて，》Der Heizer《, 》Die Verwandlung《, 》Das Urteil《 の3つの作品は内的に緊密な関連があるので，》Die Söhne《 というタイトルをつけて1冊にしたいと書いて，出版について積極的な希望まで出している。[30]

また同じ1913年10月には 》Zum Nachdenken für Herrenreiter《 がクルト・ヴォルフ社が出している1914年版の年鑑である 〉Das bunte Buch〈 に載る。この年鑑は1914年2版を必要とするに至る。こうして1915年という年を迎えることになる。

4

1915年はカフカがフォンターネ賞の賞金を受けるという事件があって重

要な年となった。M・ブロートは自伝 》Streitbares Leben《 の中で，「そもそも受賞したのはシュテルンハイムであったが，若いカフカの1913年に出た 》Der Heizer《 にたいして weitergeben したものである」，と書いている。[31] この点はあるいは誤解され易い点であり，カフカがシュテルンハイムの仲介で受賞したというような伝説もあるので，明確にしておかなければならない。

フォンターネ賞は元来カール・シュテルンハイムの3つの短篇 》Busekow《，》Napoleon《，》Schuhlin《 に与えられたものであったが，選考に当っていたF・ブライの助言もあって金銭的に裕福であったシュテルンハイムが与えられた栄誉だけを受け，賞に結びついた賞金800マルクを若いカフカの才能にたいして個人的に譲った，ということであるらしい。[32] シュテルンハイムが賞を断念したり，拒否したりしたということではない。1915年12月6日の 〉Prager Tagblatt〈 の記事には カール・シュテルンハイムが賞をカフカに weitergeben したと書かれており，当時の新聞の中でもすでに正確さを欠いている。W・エムリッヒの著書やルードルフ・ヘメルレのカフカについての Bibliographie の中で受賞したと書いているのは，[33] 従って正確ではない。クルト・ヴォルフ宛のカフカの手紙を読むと自分の賞金の意味が分からずに戸惑っている様子がよくわかる。[34] 受賞はしていない，という言い方の方が正しいのかも知れないが，自分の才能が評価されたということで，カフカにとっては大きな励みになったことは確かである。

その際，対象となったカフカの作品とは 》Der Heizer《 と 》Die Verwandlung《 の2作であったと言われる。[35] しかし 》Die Verwandlung《は1912年に書かれてはいたが，最後の部分を読むに堪えないと考えたカフカは1914年1月末に書き直している。その結果，受賞と同年同月，つまり1915年10月に雑誌 〉Die weißen Blätter〈 に掲載されたのである。従ってその評価はひよっとすると 》Der Heizer《 1作にのみ向けられたのではないか，とも考えられる。

この受賞劇の裏話はともあれ，カフカの作品を出版していたクルト・ヴ

ォルフ社としてはこの受賞劇を宣伝のために大いに利用したらしい。1915年，16年の 》Die weißen Blätter《 には 》Heizer《 や 》Verwandlung《 のほか 》Betrachtung《 も含めて宣伝されている。

》Die weißen Blätter《 はE・シュヴァーバッハの編集する雑誌であるが，彼はもとクルト・ヴォルフのもとで原稿審査の仕事をしていたことがあり，またヴォルフと親しいF・ブライが一時この編集にあたっていたこともある。ヴォルフ社はこの雑誌を宣伝のために利用したのである。こうした事情も手伝ってか 》Verwandlung《 はこの雑誌に載った翌月の11月にはすでにクルト・ヴォルフ社の 》Der jüngste Tag《 叢書の中の1冊に加えられている。

》Betrachtung《 の第2版が出たのもこの年であった。クルト・ヴォルフ社はシュテルンハイムがフォンターネ賞の賞金をカフカに譲ると知ったとき，〉Das bunte Buch〈 の宣伝の中では einmalige Auflage と断っていたにもかかわらず[36]，すぐに2版を計画した。1913年，すでにローヴォルト社はクルト・ヴォルフ社と名を改めていたが，初版本にはまだ古い社名であるエルンスト・ローボルトの名が印刷されていた。この受賞劇で世間の目がカフカに向けられているときに，新しい社名を読者に印象づけたいというのが出版社の願いであった。しかし初版の800部の残部が2版として登場しただけで，実際には増刷は行われなかった。

受賞の年の10月にはまた 》Strafen《 というタイトルで 》Das Urteil《，》In der Strafkolonie《，》Verwandlung《 という3つの作品を入れて中編集を出したいというカフカの希望ももち出された。この計画はすでに1913年に出されていたが，今回は 》Heizer《 の代りに 》In der Strafkolonie《 を加えてタイトルも前回に予定していた 》Söhne《 から 》Strafen《 に改めるというものであった[38]。結局 》Das Urteil《 の単独出版ということになったが，1916年これも 》Der jüngste Tag《 叢書の1冊となって世に出た。

1916年の 》Der Heizer《 の第2版につづいて，1917年には第3版が印刷されている。》Die Verwandlung《 も年月が明確ではないが，1918年頃，2版を重ねたようであるし，》Das Urteil《 も1919年末から1920年にかけ

て第2版が出ている。

5

このように1915年のフォンターネ賞には出版社の意図的な宣伝のせいもあって，誤り伝えられた面もあったが，カフカにとっては強い刺激となって，仕事も増え，出版のよろこびも高まった。

一般にカフカの作品発表の経過は4期に区分される。M・ブロートの強い説得によって自分の意志に反して小品を発表していた時期からヴォルフに会って少しづつ発表に意欲を示しはじめた時期，そしてフォンターネ賞の受賞劇によって出版，増刷が繰返された時期，そして第4の時期は1919年以降，カフカの死に至るまでとされる。この区分に従えば，第3期がカフカの生涯で最も実り多き時代であったが，1期からこの3期までのカフカに関わりの深かったのが今回とりあげたこの文芸誌〉Hyperion〈であった。前述したようにカフカの作品の最初の発表はこの文芸誌上であったが，これへカフカを紹介したのも，またカフカの作品を世に送り出したエルンスト・ローボルトに彼を引き合わせたのもM・ブロートであったわけで，今更ながらカフカにとってブロートの存在の大きさを感じるが，この〉Hyperion〈を通じて世に出たカフカはその編集にあたっていたF・ブライとC・シュテルンハイムを通じてフォンターネ賞に結びつくことになったのである。更にまた初めてドイツに紹介される英，仏の作家にもこの誌上で出会ったということを考え併せると，〉Hyperion〈はカフカにとってこの上ない重要な意味をもった文芸誌であったと言えよう。

註

(1) Alfred Walter Heymel に宛てた Franz Blei の手紙によって明らかである。(Schiller-Nationalmuseum, Marbach)

(2) 》Eine entschlafene Zeitschrift《 というタイトルで1911年3月19日，〉Bohemia〈紙の日曜版付録に掲載された。Deutsche Vierteljahrsschrift (1964年, Heft 4) に収録された Ludwig Dietz: Franz Kafka und die Zweimonatsschrift 'Hyperion' の Anmerkungen 46) で3月20日と書かれているのは誤り。Kafka-Symposion (Verlag Klaus Wagenbach Berlin 1965) の

中でも Paul Raabe が3月20日と誤記している。(S. 9)

(3) Alfred Walter Heymel に宛てた Franz Blei の手紙による。(1908年夏の日付無しの手紙。Schiller-Nationalmuseum, Marbach)

(4) Max Brod: Streitbares Leben　Kindler Verlag 1960 (S. 379)

またこれ以前に出た Max Brod: Franz Kafkas Glauben und Lehre Mondial Verlag AG. 1948 の中の Zeittafel の1909年の項には Zwei Stükke aus 》Beschreibung eines Kampfes《 im 〉Hyperion〈 gedruckt と書かれているだけで1908年に出た 〉Hyperion〈 については何も触れられていない。

Wilhelm Emrich: Franz Kafka　1961　Athenäum Verlag Frankfurt a. M.　Anmerkungen (S. 414)

Klaus Wagenbach: Franz Kafka　Eine Biographie seiner Jugend 1958 Francke Verlag Bern. (S. 168; 339)

Rudolf Hemmerle: Franz Kafka　Eine Bibliographie　Verlag Robert Lerche, München 1958 (S. 19)

(5) Klaus Wagenbach: Franz Kafka in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten　Rowohlts Monographien 1964 (S. 141)

(6) Briefe 1902-1924　S. Fischer Verlag 1958　Hedwig W 宛の手紙。(S. 51)

(7) 〉Deutsche Arbeit〈 (1901-1944) 「ボヘミアのドイツ人の精神生活のための月刊誌」という副題がついている。プラハの文化的，政治的状況を正確に知るためには欠かせない雑誌であり，カフカの「ドイツ文学史」その他の先生であたた August Sauer は特にこの雑誌に力を入れていた。彼は当時ボヘミアのチエコ人，ドイツ人の対立の中で一方の指導的役割を果していたと言われる。(Wagenbach: Franz Kafka　Francke 1958　S. 100) Sauer が学生の前で行なった講演 》Rede auf Schiller《 が 〉Deutsche Arbeit (1905年5月, Heft 8) に収録されているが，学生のドイツ精神の強化を力説している。

第1次大戦前まではなるほど Hugo Bergmann, Oskar Wiener, Oskar Baum, Max Brod, Paul Leppin などユダヤ系作家の作品も登場するが，大戦前後になると「大ドイツ主義」，「ユダヤ人問題」に関する論議が多くなり，政治問題が主流を占めるようになる。1920年を過ぎると，先に挙げたユダヤ系作家の名はまったくみられなくなる。カフカが亡くなった年にもカフカについての記事は無い。

珍しい論文としては政治の道に進んだカフカの従兄弟，Bruno Kafka の 》Die deutsche Akademie für höhere Frauenbildung in Prag《 が掲載されている。(Jg. 11, Heft 2　S. 74—76) 1900年代に入って10年の間にドイ

ツ各地で女子の大学進学が許可されているが，こうした事情を背景に書かれた論文であろうか。

(8) Wagenbach: Franz Kafka Eine Biographie seiner Jugend (S. 229) Jules Laforgue: Pierrot der Spaßvogel Eine Auswahl von Franz Blei und Max Brod Berlin 1909

(9) 》Eine entschlafene Zeitschrift《 (1911年3月19日，日曜版付録) 註 (2) 参照。

(10) Gustav Janouch: Gespräche mit Kafka Fischer Bücherei (S. 59)

(11) Franz Blei: Zeitgenössische Bildnisse Allert de Lange Amsterdam 1940 (S. 328)

(12) Franz Blei 前掲書 (S. 330)

(13) Max Brod: Streitbares Leben Kindler Verlag 1960 (S. 238; 266)

(14) Wagenbach 前掲書 (S. 121)

(15) 同上書 (S. 122)

(16) 同上書 (S. 219)

(17) Gustav Janouch 前掲書 (S. 59 f.)

(18) Wagenbach 前掲書 (S. 252)

(19) 同上書 (S. 159; 229; 及び Max Brod: Streitbares Leben S. 279)

(20) Tagebücher 1914年1月8日 (S. 350)

(21) 〉Bohemia〈 紙。1909年9月29日 Nr. 269 Morgen-Ausgabe M. Brod が編集した Kafka の 》Briefe an Felice《 (S. 559) で9月28日と書かれているのは誤り。29日が正しい。Ludwig Dietz の前掲論文の Anmerkungen (44) でも28日と誤記されている。

(22) 〉Bohemia〈 紙。1910年3月27日

(23) 同上紙 1910年1月16日

(24) 註 (9) 参照。

(25) Wagenbach 前掲書 (S. 171)

(26) Tagebücher 1912年8月11日 (S. 282); 1912年8月20日 (S. 285)

(27) Brod, Pick, Ehrenstein の批評はいづれも Kafka-Symposion Verlag Klaus Wagenbach Berlin 1965 の中に収録されている。Brod (S. 129-131), Pick (S. 132-134), Ehrenstein (S. 135-136)

(28) 》Erinnerungen an Franz Kafka《 von Rudolf Fuchs (in: Max Brod: Über Franz Kafka Fischer Bücherei S. 368)

(29) 〉Arkadia〈 Leipzig Kurt Wolff 1913 (S. 53-65)

(30) Briefe 1913年4月4日及び11日の手紙。(S. 115; 116)

(31) Max Brod: Franz Kafka Eine Biographie 1937 Prag 1946 New York (S. 189)

(32) Kafka-Symposion (S. 103)

しかし 〉Die weißen Blätter〈 の1915年12月号，1916年1月号の裏表紙の内側に Sternheim の受賞作，外側に Kafka の 》Heizer《, 》Verwandlung《, 》Betrachtung《 の宣伝が載っており，これでは読者にとって Kafka の受賞作品も明確ではない。

(33) Wilhelm Emrich 前掲書 (S. 415; 416); Rudolf Hemmerle 前掲書 (S. 21)

(34) Briefe 1915年10月15日；20日 (S. 133-135)

(35) Kafka-Symposion (S. 104)

(36) 〉Das bunte Buch〈 Leipzig Kurt Wolff Verlag 1914 (S. 172)

(37) Kafka-Symposion (S. 106)

(38) Briefe Kurt Wolff 宛 (1913年4月11日) 及び Kurt Wolff Verlag の支配人 Georg Heinrich Meyer 宛 (1915年10月15日) の手紙。

本稿は1950年10月13日，日本独文学会秋期研究発表会での口頭発表に加筆したものである。

書名，雑誌名は敢て原名のままで挙げてある。邦訳した場合，かえって分りにくくなるものが含まれているからである。併せてお断りしておきたい。